

はじめに、極く簡単に
要点を示します。

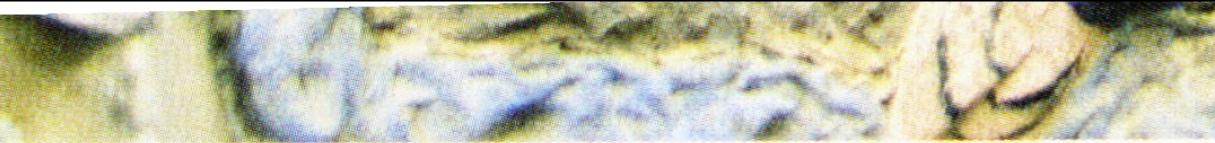
最初の「キンベル」との出会い



消えゆく左官職人の技
漫絵

写真・文 藤田洋三
小学館(1996)

最初の「キンベル」との出会い



↑土蔵の正面戸前にあるやや太めの「麒麟(きりん)」。青色の顔料は、キング・オブ・ブルーが訛って職人達の間で「キンベル」と呼ばれた。



↑土蔵の正面戸前にあるやや太めの「麒麟(きりん)」。青色の顔料は、キング・オブ・ブルーが訛って職人達の間

～熱帯睡蓮 King of blue の、
あの色を、ラピスラズリに混ぜたに
違いない。



ところが、最近
興味深い資料に
出合いました

餘景道序（第二調）

卷之三

敵對の歴史

第四集

1. 宗教

メアンダルオーダー八九〇、流域は自然流束として面積をめたうアドアリナ。流域地盤に田舎する雨量測定点の河川として、吉永川と名づけられています。流域には、開拓地帯、丁度耕作して耕作利用であった。そのかわり砂利層、すなまきともいふてあります。また、砂利層であつた。

人情は社會上に徳を始めたと、劣悪的行為。七種の惡習など。時を同じくして日本が進むべき道。而して、ラマチリヤンを志望したのである。人情の釋迦陀羅の生活の始まりと、圓教の聖堂式は豈圖々こそこそよく徳をもる。反対された時代を背景として現れたものである。

7. 亂世の面影

平成 14.1.8 図版
The History of Figures
Eduardo Tadevosyan
- 大きな図 - 素描式図式
- 中国数学の歴史概観 (1.6.34) (= 102-103)

得ていた。この時代、伊藤松園は比較的に入子し易い赤褐色の車を販売する事となっていました。

3. ワザエラブトの細胞

古代ノアの説教にノアツボ等の神が高天原にて開闢し、世界萬物は既に現れる一時代の傳承している。在牘品等が古よりの御物があり、多々くわいいう御道の御物が御祀されている。聖堂に見る如きの工藝品は日本文化史の上でも御珍重され、エスザン御院に御供えられた本邦の御物に於てのところを御覧。

白色：イヨウタ $(CaCO_3)_n$ 石膏 $CaSO_4 \cdot 2H_2O$
 黄色：黄鉛 $[Cl_4]^+$ ピントの悪さためにタメノアキ先から採取された
 ピンク：アズベリト $CaCO_3$

白色：天然微光色，弱二
黑色：エントノトナー (C90, M80, Y20), 天然微光 12
セラミック

総合：カジラ P-ICu₂(KHSI₄)₃Cl₂ クリーンアクリタミ
西色：土糞+イモキ、3M 不織布を複数層「AgusN」
西色：カジラ P-ICu₂(KHSI₄)₃Cl₂ クリーンアクリタミ

種類が少ないので、アーティストの才能を最大限に引き出す



図-1： 四毛ヒューリー・EDC 1500 12000 の構造に関する工書



(凡例) パスル、スルル
(略称) 大日本洋服縫製会社本部即ち
(略称) 沖縄の研究(沖縄)、那覇の原大
の研究、國論
(略称) 1945年復興原動力研究会、沖縄平
賊事件研究会等皆、1945年復興委
員會より、那覇タクシーオブ島頭再開
工として那覇市役所に下りる時光。
1945年復興本部總務課人、1947
年手写複数

何と、・・・

新編』¹⁰⁹⁾ のペレ

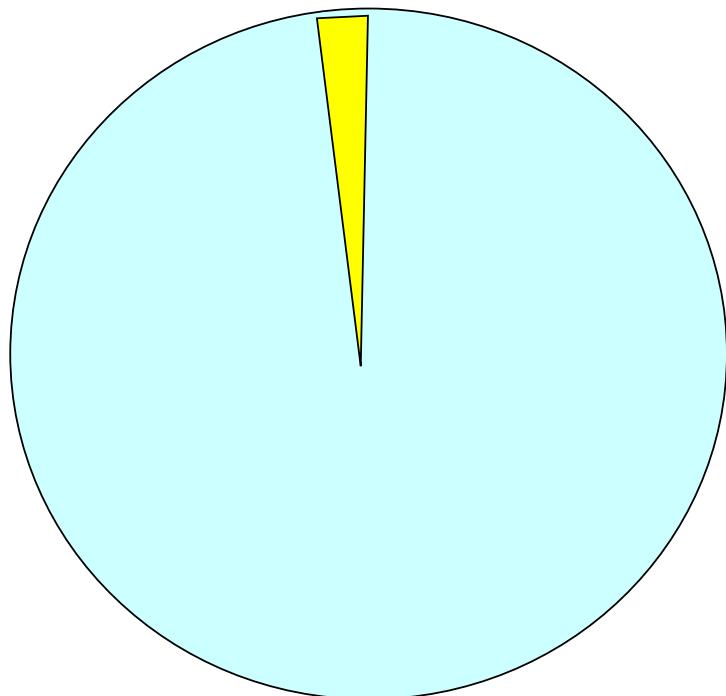
昭和 12 年（1937）

であった。明治 15 年出版の『絵具染料薬品略説』¹¹⁰⁾ では「ベル」と表示され、大正 8 年出版『工業薬品大辞典』¹¹¹⁾では「ペレンス」と表示されている。

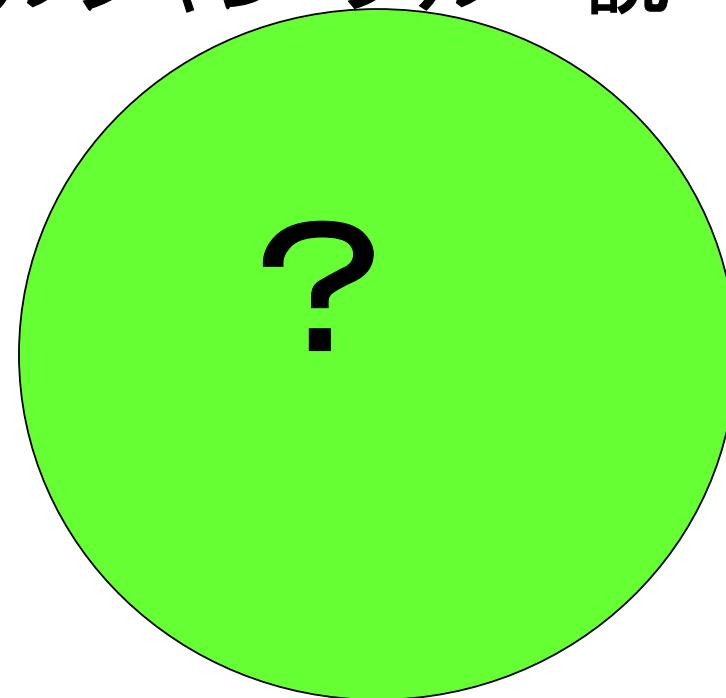
長崎へ来航の船員たちの脇荷としてプルシャンブルーが持ち込まれ、長崎で紺青と訳された¹¹²⁾ が文化 4 年（1807）の記録が最も古く、それ以前は未詳である。江戸時代の大坂の絵具屋の呼称¹¹³⁾ としては「ペレンス」「ベル（金ベル、濃ベル、蘭口ベル）」であった。そして明治、大正、昭和になっても未だ「ベル」がその呼称として残っていた。

形勢逆転か

ラピスラズリ説
(ウルトラマリン・ブルー)



プルシャン・ブルー説





プルシャンブルーの日本史

2021年02月18日
春日

1. キンベルと要点
2. 伊藤若冲のプルシアンブルー
3. 北斎、広重のプルシアンブルー
4. プルシャンブルーの歴史・日本編
5. 鎌絵の青の輝きは、
構造色か螢石か
6. その他の青

作成中、未完

1. キンベルと要点

錆絵の鳳凰について、ラピスラズリ説が圧倒的優勢のなかで、敢えて「プルシアンブルー」という異なる色を持ちだすのは苦しいものがありますが、新たなストーリーです。

プルシアンブルーとはなにか、というのが、説明の中心で、ガイドで使うことは難しいと思いますが、浮世絵の話は、海外からのゲストにも、興味をもってもらえるかと思います。

以前にもお話した、写真家の藤田洋三氏が、錆絵に関する著書の中で述べている言葉の、『サフラン酒の蔵の建設工事をしていた当時の職人の会話の「キンベル」』という話は軽視できません。

そこで、春日の珍説として、『鮮やかでかつ堅牢な青色を維持したいため、ベースはラビスラズリを混ぜた漆喰、その上に、構造色で輝く熱帯睡蓮のキングオブブルーを調合した』と考え、錆絵の青のベースにラピスラズリ、そしてプラスアルファに熱帯睡蓮の染料、という方法を想像していました。

ところが、最近、別の情報として、江戸時代に輸入品のプルシャン・ブルーを

「金ベル」と呼んだという記述を知り、錆絵の青のベースは、プルシャン・ブルーなのかも知れない、と考えるようになりました。

でも付加的に構造色などプラスアルファの効果を使ったという見方を捨て去ることはできず、発光色として蛍石を混合する策もあるな、とかいろいろ考えています。そこで、今回は、

ラビスラズリ(ウルトラマリン・ブルー)説、
プルシャン・ブルー説を両論併記でまとめました。

要は、錆絵蔵の工事現場で聞こえた「金ベル」という言葉の解釈でして、

- (A) キングオブブルーの通称呼称なのか、
- (B) プルシャン・ブルーの業界用語なのか、
ということなのです。

そして、前者の (A)説には、ラビスラズリという人気が後押しがある、ということ。

2. 伊藤若冲のプルシアンブルー

伊藤若冲『動植綵絵』群魚図・「鯛」
(1757-1766)



黒ずんだ濃紺色で
描かれているルリハタが
プルシアンブルーと
判定されている。
日本最初のプルシャンブルーである。



若冲は、その画業の初期に、中国の「宋元画」を学び、1千点を模写したと伝えられています。伊藤若冲の本当の革新性は、宋元画の文正、更に狩野探幽の細密画を越えた、脅威的なテクニック、そして独自の描画法にあると云われています。

それにしても、この製作を始める4年前に国内初搬入の顔料が、全30幅の測定913ポイントのうち只一箇所で発見されたのです。最新の顔料への挑戦だったのでしょうか、どんな実験をして、決断したのか、知りたいです。

3. 北斎、広重のプルシアンブルー

「凱風快晴」、
「神奈川沖浪裏」
(1831-33年)



北斎ブルー

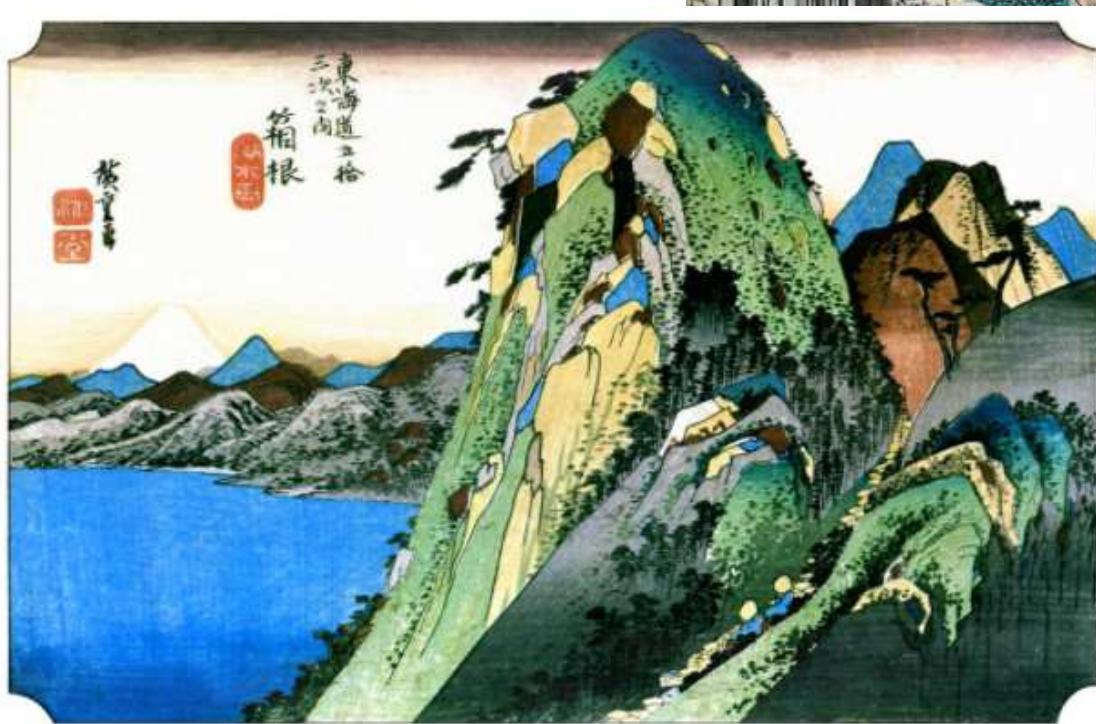


北斎ブルー 「諸国瀧廻り」(1833年)



歌川広重

「東海道五拾三次之内」
(1831-33年)



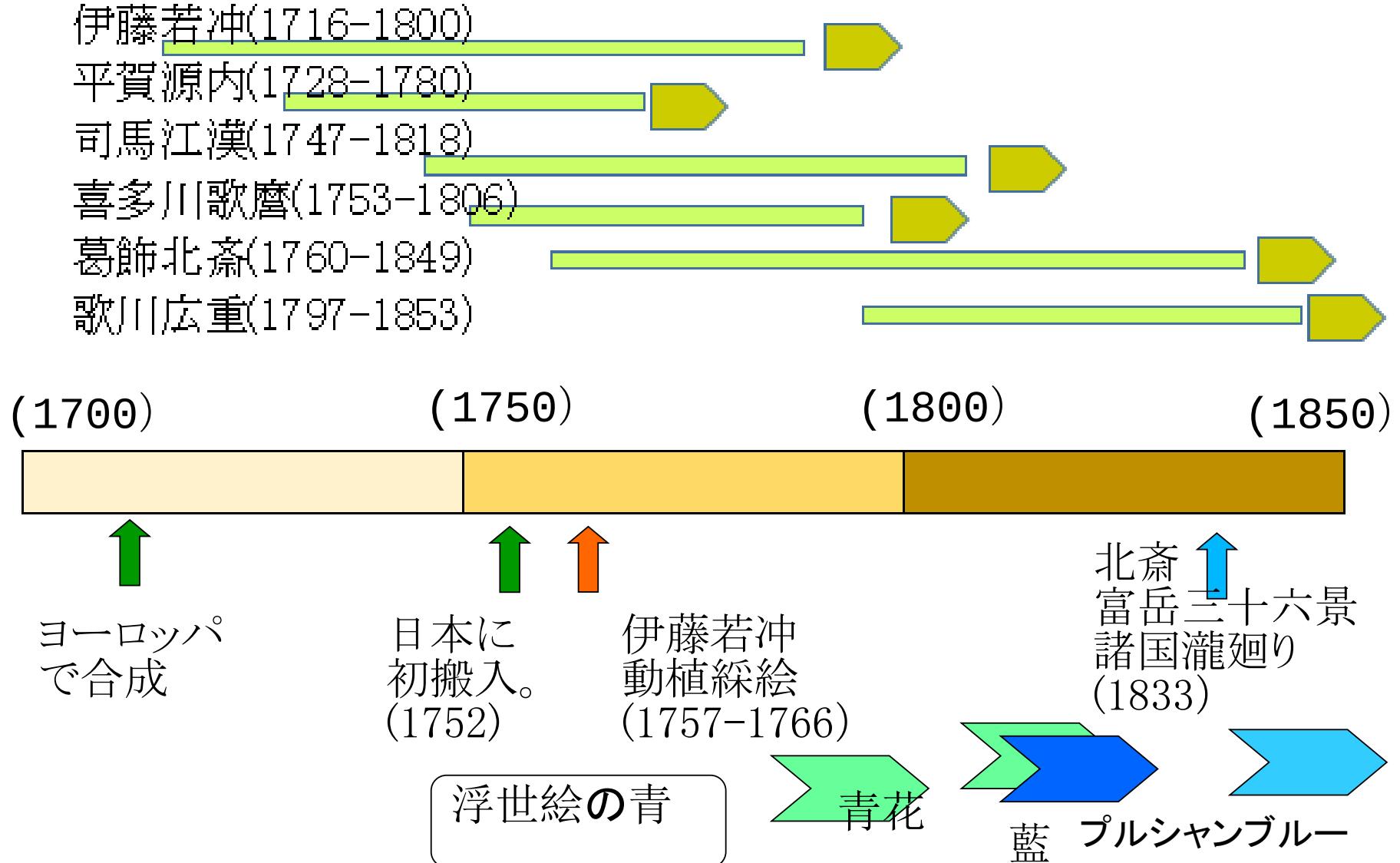
少し前の時代、17世紀のブルー（1701年以前）

尾形光琳の燕子花図の花弁は、群青、紺青と緑青。



群青、紺青は、ともにアズライト(藍銅鉱)からの粉末の細かさによる。
江戸期後期以降、良質の紺青は日本では手に入らなくなつたという。

4. プルシャンブルーの歴史・日本編



若冲の動植綵絵の青のいろは、

群青

藍

そして、プルシアンブルー

浮世絵にプルシアンブルー が多用され始めた
のは、まさに、北斎、広重の活躍する1830年代。

極く一部に、フルッシュンブルーを使用。

おそらく日本で一番最初。

次に平賀源内が使用、とされています。

1800年までは青花(ツユクサ)の青、
1830年まではそれに加えて藍の青でした。
そして突如、プルシアンブルーの青が
加わったのです。

これが、浮世絵版画の色彩の豊かさ、
美しさに決定的影响を与えました。
ヨーロッパで印象派の画家が使い始めたのは、
この40年後です。本当に驚きです。

ゴッホもこの色を好みました。アルル時代の傑作である「星降る夜」(1888。オルセー美術館)にも、コバルトブルーもウルトラマリンとともに、プルシアン・ブルーが使われていることが確認されています。



弟テオへの手紙の中で、「日本の巨匠から大きな影響を受けた」と明言していることが、よく知られています。

青のグラデーションを生かした浮世絵の
隆盛は、まさに新たな顔料、プルシアンブルー
との出会いであったと云えます。
鎖国の時代でも、貴重品でしたでしょうに、
ちゃんと手に入れていたというのは、
南蛮通詞、貿易商、版元、版画家、誰の
手腕・目利きだったのでしょうか。
そして、刷り師の腕もあったとのことです。

以上のように、最近、江戸時代に輸入品のプルシャン・ブルーを「金ベル」と呼び、明治から昭和にかけても、この云い方は残ったということを知りまして、(*1) 鎫絵の青のベースも、もしかしたら、プルシャン・ブルーなのかも知れない、と考えるようになった次第です。

(*1) 鶴田榮一、”絵画講座第Ⅱ講 顔料の歴史”、色材、vol75、2002)

『色材』は、国内唯一の色材に関する学術団体、色材協会の発行する学術誌です。

前述のように、プルシャンブルーが、ヨーロッパ絵画で使われ始めたのは印象派以降のようです。印象派の画家が好んで使った色であったが、プルシャン・ブルーは次第に使われなくなり、あとで開発されたコバルト・ブルーなどの合成青色顔料にとって代わられました。

考えられる理由は、混色に強いプルシャンブルーを扱う難しさにあつたといいます。

現在も、油絵具12色セットの青は、ウルトラマリンとコバルトブルーという絵具チューブが多いです。

現在、日本画、油絵、ともに使いやすいと人気な青は、フタロシアニンブルーです。

色合いに優れ鮮明で、耐光性が高く(褪色が少なく)、堅牢な(耐久性にすぐれる)ことから、好まれています。

20世紀前半に、合成化学で生まれた新色です。

5. 鎔絵の青の輝きは、構造色か螢石か（未完）

既に「熱帯睡蓮」のキングオブブルーは、確かに美しく、鎔絵の鳳凰の輝きに似ています。染料とはいえ、レー化する方法もあり、使用に壁はありません。

「熱帯睡蓮」の構造色効果にこだわる

必要はなくなりましたが、候補には違いないと思います。

もうひとつの候補は、螢石の利用です。

フレスコ画に螢石を使っておられる日本画家も、
おられます。

イギリス産螢石ですと、太陽光でも輝くそうで、もしサフラン酒の
鎔絵に使ったとしても、不思議ではありません。

いずれにせよ、特別な螢石でしょう。



「熱帯睡蓮」のような植物性の構造色の身近な例



孔雀サボテン

「構造色ではないですが、染料から作られた赤の色は、たくさんあります、油絵具でポピュラーなものに、クリムゾン・レーキ、カーマイン・マダーがあります。

藍玉も、**2～10%**の不溶性のインジゴが含まれ、レーキ化のひとつと云えます。

藍の染色とは、藍玉に石灰などをえて発酵させて水溶性のインドキシル（これが藍汁）にし、布を漬けて空気にさらすと酸化されて再度インジゴになり、染色されるという仕掛けです。



鳳凰の色の全部を、キングオブブルーを
レー化したものを使ったという考えも
ありえるのかなと、思いますが、
皆さんに愛されているラピスラズリが
全く使われていないという、悲しいことに
なってしまいます…。

余りに大胆なものすごい仮説ですが、
でも、孔雀サボテンの、あの豪華な色を
考えますと、植物性染料のみという可能
性も、ゼロではないと思っています。

(微細構造を破壊しないという技術的
障壁はあります。)

6. その他の青（未完）

(1) 景徳鎮磁器とコバルト・ブルー

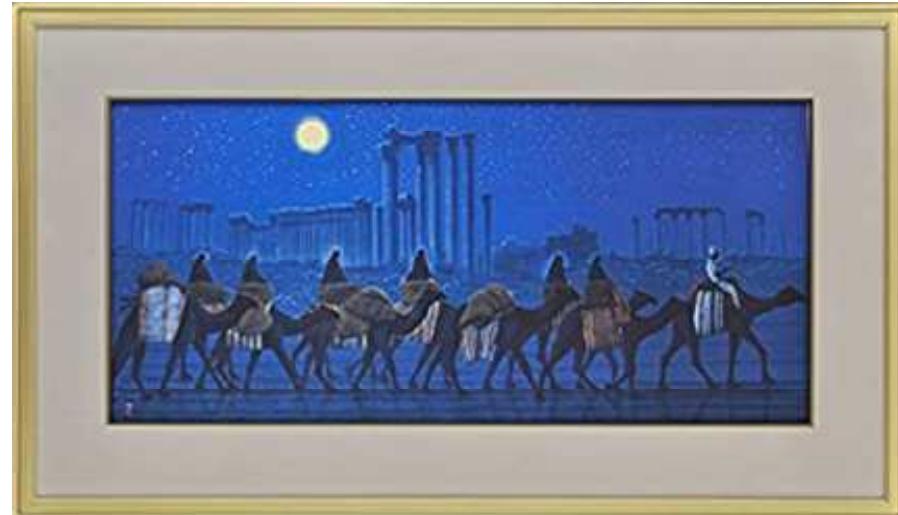
元代末期、シルクロードを経由してイスラムからもたらされた天然コバルト・回青(ホイチン)によって、景德鎮磁器と染付の技術が出会い、「青花(チンホア)」(染付)として完成しました。

英語では Blue and White と呼ばれているそうですが、真偽は確認できませんでした。

(2) 平山郁夫画伯の青

(3) 東山魁夷画伯の青、奥田元宋画伯の赤

平山郁夫画伯の青



パルミラ遺跡を行く・夜(2006)

(平山郁夫シルクロード美術館蔵)



同・朝

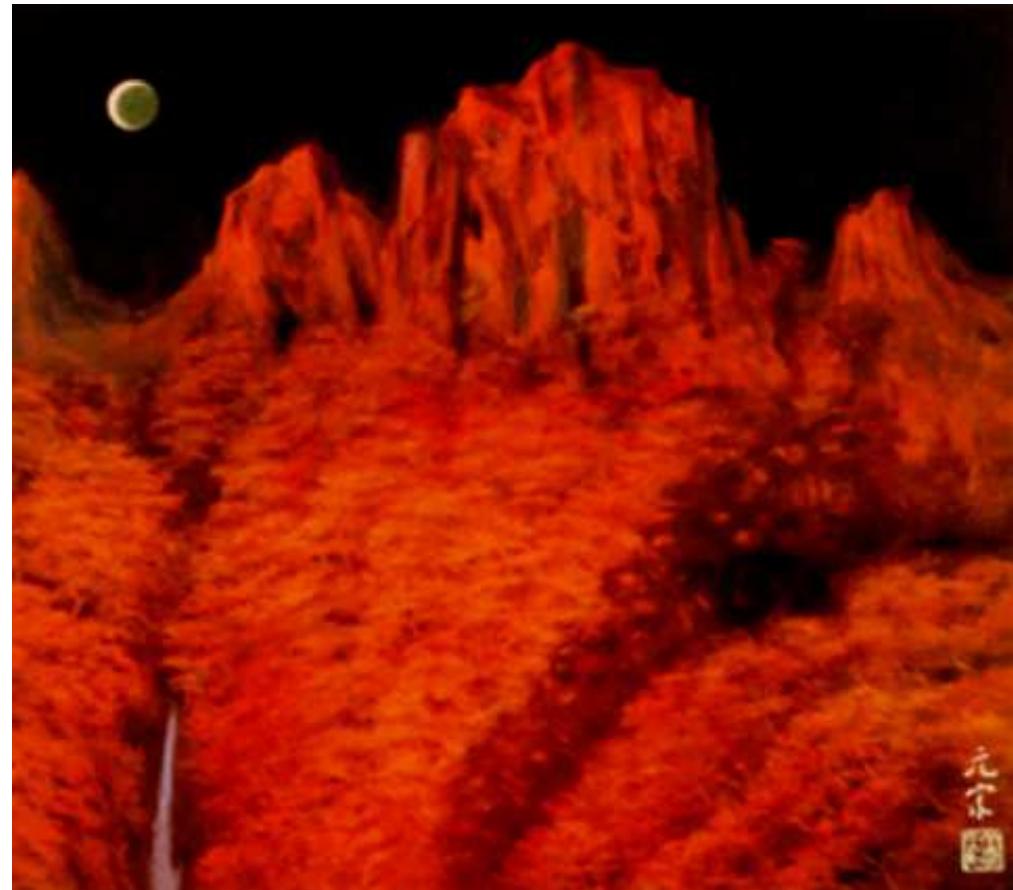
余談ですが、絵の背景にパルミラ宮殿の遺跡が描かれています。
この宮殿のある中心地から離れた郊外にある地下墓の、入り口を飾る魔除けが、
鬼瓦のルーツの一つとされています。

奥田元宋画伯の赤

奥田元宋画伯の赤は、
赤色の最高到達点の
ひとつと思います。

自然の紅葉に染まる山の
色を越え、個人的には、
錦鯉の金昭和の「赤」にしか
見られない色と思っています。

青の話なのに、何で「赤」と
思っておられる人もいると
思います。
それは、…。



赤峰秋映

サフラン酒の青い鳳凰は、本来の四靈獸である
「北の守護神」なら、朱雀、つまり赤なのです。
そこに、四瑞獸、或いは最上位の鳳凰を、
持ってきたのです。
朱雀は、英語では、Virmilion Bird です。

もし、画伯が青をテーマに連作されたら、どんな
色になるだろう、きっと今まで見たことのない青に
違ひなく、サフラン酒の鳳凰の青に似ていると
いいな、と想像していますが、一方、本来の朱雀、
その名称にあるVirmilion の色を、
元宋さんに決定して下さいと依頼したら、どんな色
になさったか、こんな想像も、楽しくなります。

錆絵の絵柄の解釈、申の不在存在、錆絵の色材、
更に庭園のテーマ、…

本当に、仁太郎さんは、素敵な謎を、
たくさん残してくれました。

なぜ、記録を残さなかったのか、という疑問を
持っていたのですが、ここまで「考え方斐のある謎」が
あることを思いますと、
敢えて、謎解きの愉しみを残した、と云うべきなのでしょう。